

好悪判断と美醜判断の違いが選択的注意機能に及ぼす影響

--顔ストループ課題を用いた検討--

中山弘菜（指導教員：西村律子）

キーワード：好悪判断，美醜判断，選択的注意機能，顔ストループ課題

目的

Che et al. (2021) は美しさの判断と好ましさの判断には WM 資源を利用しているが、WM 資源への要求の仕方は若干異っており、美しさの判断は、今まで学習された美のテンプレートと知覚された対象の刺激の特徴を照らし合わせるというプロセスを伴い、そのための処理資源が好ましさの判断よりも多く必要だと考えられると述べている。

適合性効果量は認知的葛藤課題を実施した際、設定された一致条件と不一致条件の成績の差で算出されるものであり、適合性効果量が多いということは、選択的注意機能の低下を意味し、適合性効果量が少ないということは選択的注意機能を維持できていることを意味する。

本研究の目的は、好悪判断と美醜判断が使用する処理資源量の違いを検討することである。顔画像の好悪判断を行う場合、好悪判断の際に処理資源を使う量が少なく、一方美醜判断を行う場合は処理資源の利用量が多いと考えられる。顔ストループ課題を実施すると、好悪判断を行っている際には処理資源が余り、余った分が自動的に課題無関連刺激の処理に使用される。そのため適合性効果量は大きくなると予測される。しかし、美醜判断を行っている際には資源が残らず、課題無関連刺激の処理は行われず、適合性効果量は小さくなると予測される。

方法

18 歳から 39 歳までの成人 201 名（男性 111 名、女性 86 名、その他 4 名）が実験に参加した。平均年齢は 32.50 歳 ($SD = 4.90$) であった。独立変数は顔刺激に対する判断基準の違いとストループ課題の一致性であった。顔刺激に対する判断基準の違いの水準は好悪判断と美醜判断の 2 つであり、ストループ課題の一致性の水準は一致条件と不一致条件の 2 つであった。従属変数は反応時間と誤答率であった。2 要因の参加者内計画であった。実施する顔ストループ課題の条件は、顔画像の性別と文字の性別が一致する一致条件と、顔画像の性別と文字の性別が一致しない不一致条件の 2 つであった。判断課題の条件は、顔画像に対して性別判断を行った後に好悪判断を行う条件と、顔画像に対して性別判断を行った後に美醜判断を行う条件の 2 つであった。各条件、練習 4 試行、本番 30 試行で構成され、各条件、同じ顔画像を使用した。顔ストループ課題は、呈示された人間の顔画像と性別を表す赤文字に対して、文字を無視して顔画像の性別判断を行うものであった。その後、好悪判断もしくは美醜判断を行った。好悪判断の条件では、参加者は呈示される顔に対し、性別の判断と好悪判断を同時に行うことを求められた。美醜判断の条件では、性別の判断と美醜判断を同時に行うことを求められた。顔の上下に呈示される文字は無視して判断を行い、対応するキーを正確に押すことを求められた。画面に注視点が呈示された後、顔画像と、その顔の上下に性別を表す赤文字が同時に呈示され、参加者は顔に対し、赤文字を無視し、好悪判断の条件では性別判断と好悪判断を、美醜判断の条件では性別判断と美醜判断を行い、評価の回答を求められた。好悪判断と美醜判断の順序はカウンターバランスがとられた。

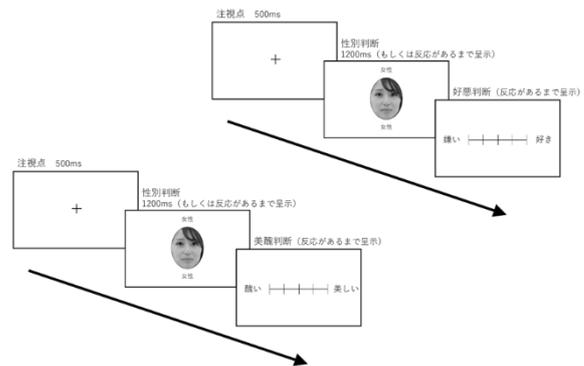


図1 性別判断と美醜判断条件、性別判断と好悪判断条件の1試行の流れ

結果

分析に使用したデータは 201 名中 56 名（男性 28 名、女性 27 名、その他 1 名）のデータであった。誤答率が 50% 以上の参加者は除外した。使用したデータの平均年齢は 31.36 歳 ($SD = 4.98$) であった。2（顔刺激に対する判断基準の違い：好悪判断・美醜判断） \times 2（ストループ課題の一致性：一致条件・不一致条件）の 2 要因参加者内分散分析を行った。結果、反応時間では、顔刺激に対する判断基準の違いの主効果は有意ではなかった ($F(1, 55) = 0.56, ns$)。また、ストループ課題の一致性は主効果が有意ではなかったものの、有意傾向が出た ($F(1, 55) = 3.37, p < .10$)。したがって、一致条件の反応時間 (850ms) に比べ、不一致条件の反応時間 (890ms) の方が、遅い傾向が認められた。交互作用も有意ではなかった ($F(1, 55) = 1.05, ns$)。誤答率では、顔刺激に対する判断基準の違いの主効果は有意ではなかった ($F(1, 55) = 1.99, ns$)。また、ストループ課題の一致性も主効果は有意ではなかった ($F(1, 55) = 0.60, ns$)。交互作用も有意ではなかった ($F(1, 55) = 1.59, ns$)。

考察

交互作用が有意ではなかったという結果について、刺激に顔画像を用いたことが理由だと考えられる。Lavie et al. (2003) は、顔は課題の負荷のレベルには影響されないことや、顔には特有の容量制限がある可能性を述べている。顔処理には独自の処理のルートがあり、顔専用の処理資源が存在し、顔処理の際には専用の資源が使われる可能性がある。

引用文献

- Che, J., Sun, X., Skov, M., Vartanian, O., Rosselló, J., & Nadal, M. (2021). The role of working memory capacity in evaluative judgments of liking and beauty. *Cognition and Emotion*, 35, 1407-1415.
- Lavie, N., Ro, T., & Russell, C. (2003). The role of perceptual load in processing distractor faces. *Psychological Science*, 14, 510-515.